

アフリカ「授業研究による教育の質的向上」研修を視察して

独立行政法人国際協力機構 国際協力専門員(基礎教育) 又地 淳

1990年にタイで行われた「万人のための教育」世界会議以降、基礎教育に対する支援が国際的に活発になり、日本政府のODA実施機関である国際協力機構（以下、JICA）は、開発途上国（以下、途上国）に対する基礎教育支援に力を入れてきた。

科学技術開発を通して経済発展を目指す途上国では理工系人材の育成が急務である一方で、理数系教科の成績が国際的に見て低迷しており、理数科教育の質の改善が大きな課題となっている。そのため、TIMSSやPISA等の国際学力テストにおいて常に上位グループに位置する日本に対し、理数科教育の改善に対する支援要請が多くの途上国から寄せられるようになった。

JICAの基礎教育支援は、これまで授業の改善と現職教員の能力開発を中心に取り組まれてきた。生徒が教師の話聞くだけの教師中心の授業から、活動を通して生徒自身が考え、答えを見つける生徒中心の授業への転換を図るための指導法の開発や、そのような指導法を教師が学ぶ機会としての現職教員研修の仕組みづくりがその中心であった。

近年、日本の授業研究が国際的に注目されるようになったが、長距離の移動や宿泊を必要としない校内研修型授業研究は、途上国にとって魅力的な現職研修形態として受け入れられ、授業研究の導入を目指すJICAプロジェクトは2015年までに世界27ヶ国で実施された。しかし、指導内容の正誤確認や教師の説明や板書の仕方などの表面的な議論に終始するような授業検討会が少なくなく、現場の日本人関係者の間で「PDCAサイクルを回すだけの授業研究で果たして教師の力量形成につながるのだろうか」という懸念が議論されるようになった。

このような背景のもと、授業研究の質の向上を目的として、「アフリカ授業研究による教育の質の向上」研修を福井大学に依頼することとなった。このたび同研修を視察する機会に恵まれたが、JICAが実施する他の研修には見られない特長が本研修に見られた。

たとえば、研修員自身によるアウトプットの機会が非常に豊富である。JICAの他の本邦研修でも中間時点や研修終了時に研修員による振り返りや発表が行われるが、本研修では研修員による振り返りや発表そのものが研修の主たる活動として毎日行われた。自分の意見を積極的に表現することを好むアフリカからの研修員にとって、非常に満足感が高いものになったと思われる。

さらに、単にアウトプットの機会が多いだけではなく、その過程で「省察（Reflection）」が極めて効果的に取り入れられていた。個人による省察、グループによる省察、グループの省察に対する個人の省察など、省察が重層的に取り入れられている。省察を通して新たな問題意識が醸成され、その答えを視察や討議によって見出していくというサイクルが繰り返され、研修員自身が省察することの重要性を

内容

巻頭言 (1)

JICA/DPDT Knowledge Co-Creation Program 報告(2)

11月合同カンファレンスに参加して (4)

インターンシップ／週間カンファレンス報告 (8)

スクールリーダーだより (9)

研究集会・公開研究会などの報告 (11)

実践研究福井ラウンドテーブル 案内 (16)

体感するとともに省察の方法を体得していく様子が見られた。

また、本研修では、事前に発表資料を準備するような「プレゼンテーション」という形態をとらず、6名程度からなる小グループの場で、各自がまとめた個人探究の記録を見ながら、「同僚」と話し合うかのような雰囲気の中で議論が交わされていた。リラックスした雰囲気の中で交わされる自然な会話であるからこそ、互いの本音が出やすく、本質的な議論が深まっていく様子が見られた。

JICA 事業では、途上国自身が自らの力で国づくりを進めていけるよう途上国側に核となる人材を育成することを重視している。授業運営や授業研究などの実践は、「形式知」のように文章化して伝えることが難しい「暗黙知」であるため、途上国の研修員が直接日本の現場を体感することのできる本邦での研修は、途上国側の中核人材にそのような「暗黙知」を伝える場として重要な役割を果たしている。

本研修では学校や授業の視察や教師との意見交換を通して得られた気づきを研修員自身が文章化し記録することにより自分の言葉として「形式知」化

し、さらに、それらを小グループにおける討議や省察を通して、自分の知識として咀嚼していく様子が見られた。このように、本研修では、日本の教育実践を支えている教育関係者の価値観、考え方や方法を研修員自らが「発見」し、他の研修員との議論を通して、帰国後に自国で活用可能な知見として編み直していく様子が見られた。

最終発表では、本研修を通して学んだことを、自国の教育改善のために活用したいという研修員一人一人の強い思いが感じられた。ただし、本邦研修で抱いたそのような思いを、帰国後に、同じ経験を共有していない同僚、上司、関係者に伝えることは容易ではない。今回の研修で、研修員が抱いた「やる気」をどのように持続させ、実践につなげることができるかが、今後の課題となろう。

長年にわたり蓄積された実践研究の成果が随所に活用された、研修員にとって気づきの多い研修を今回企画運営していただいたコースリーダーの柳澤教授をはじめ、研修に関わっていただいた関係者の方々に、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

JICA/DPDT Knowledge Co-Creation Program

Fukui Round Table Cross-Sessions for the Studies in and on Practice

Communities of Practice and Reflection

Winter 2016

at the University of Fukui

今年度よりスタートした JICA との Knowledge Co-Creation Program において、11 月 23 日（水）クロス・セッションが行われました。

実践コミュニティ創造の課題は国を超えて共通する

北海道大学 准教授 篠原 岳司

実践コミュニティの創造に関わる実践的な課題は国を超えて共通するようだ。JICA とのコラボレーションによる福井大学のラウンドテーブルにて、リズ・ハートマン氏のファシリテートのもと、マラウィのビクトリア氏とオーストラリアのクリスティ氏の話をついての率直な感想はそれである。教師は、自分が

教える教科とは違う授業を見て、実践の振り返りを同僚と交流し合おうと促されても、その意味を直感的に理解し、すぐに自分のものにできるわけではない。探究的な学びや創造性の育成など、現代の矛盾を克服し未来を創造していく子どもたちのために学校と教師に向けられる期待は大きい、そのための学

校改革の鍵となる同僚との協働，そして実践のリフレクションは，一筋縄では決して広がらない。これは，わが国の実践研究の蓄積からも教訓的に示されていることである。

ビクトリア氏から語られたマラウィの固有の状況は，教師の協働のための環境の整備の重要性を浮かび上がらせる。学校の数に対する子どもの人数の多さから，一学級のサイズは 50 人標準で一日二部制を採用している。この状況は教師にとって決して楽なものではなく，それに合わせた授業の分担や組織の区別も進んでいる。このような所与の条件の中で，学校をあげて教師の協働的な学びを進めることは容易ではないだろう。しかし，ビクトリア氏は帰国後を見据え，改善に向けた思いを語る。彼女の考えは，協働することの価値をトップダウンによって伝達し実践させるのではなく，自らの実践を通じて，まずは自己の周囲で実践コミュニティを創造し，その理解と交流の輪を徐々に広げていこうというものである。この考え方は，教育制度，教育政策の研究をする私にとっても最も印象的な言葉であり，彼女のような実践家を支える政策のあり方，その実践を阻害しない制度の検証を改めて意識させるものでもあった。

協働やリフレクションの強制による教師からの反作用の現実については，オーストラリアのクリスティ氏からも語られた。オーストラリアでも既に教師のリフレクションの重要性は意識され，学校においても政策としても近年は推進の過程があるようだ。本来のリフレクションとは，日々の授業や教育活動を過去の取組を踏まえて構想するプロセスの中に認められるはずであり，リフレクションを進める上での課題とは，教師の自己対話の質をいかに豊かにし，自己の中に未来の手掛かりを探究できるかにある。しかし，政策としてリフレクションを標榜し作成されるチェックリストの提示と活用は，教師にとって時間も方法も内容も管理され，受動的な思考ばかり

を余儀なくされ，対話の対象は自己ではなく政策となりうるものである。クリスティ氏が語るのは，こうした積み重ねの中で教師はリフレクションを誤って捉え，疎ましいものとして価値形成されてしまうという矛盾であった。しかしながら，展望も浮かび上がる。それは改めて教師の日常に着目し，教師が無意識のうちに重ねている自己との対話の意味を，協働の中で意識的につかめる機会を創り出すことである。そのことによって，協働によるリフレクションの必然性が，教師各々の中に少しずつ形成され，実践コミュニティが耕されていくはずである。

ビクトリア氏とクリスティ氏の話は，アンディ・ハーグリーブスが指摘した，個人主義の克服のために画策された同僚性がより個人主義を強めてしまうという矛盾を思い起こさせるものであった。その克服は，実践コミュニティを耕す，一人の，そして協働による教師たちの学びと省察の地道な積み重ねにかかっているに違いない。ラウンドテーブルでの交流を通じて，このような共通課題を世界規模でも再確認できた意味は私にとって大きい。グローバルなビジョンを確保し，ローカルに実践と研究を重ねていく意欲を改めてかき立てられた貴重な時間であった。刺激ある交流機会をいただいたグループの皆さんに改めて感謝したく思う。



Round table reflection report

Gudeiks Andrius

First of all, thank you for the opportunity to participate in this event. It was good experience to learn how such activities are carried out. The 3 weeks of discussions and reflection really

helped me to understand what can be done next. What is more, it was interesting to observe the difference in the point of view of the people from the administrative office and that of the teachers

in practice (like me). In the round table discussion the reports were presented by me and Aisha. Aisha was more focused on the teacher training and on the activities DPDT is responsible for, for instance, helping the teachers and training them while they are working in schools. As for me, I am more interested in the emotional environment of students and teachers. To my mind, only a positive emotional environment motivates students to learn and teachers to improve. I have myself as a good example, presenting my change from a strict teacher into a teacher who wants to understand students and looks for the ways to improve his teaching. Also, Aisha and I talked about our future steps to imply lesson study in our countries. Both of us have different perspectives. Aisha is going to try creating small lesson groups in schools and support them. I am going to create the first small lesson study group in my own school and to lead it. So in our round table discussion these subjects have been discussed.

The following day we had a short discussion about the future steps towards lesson study in African countries. I was amazed how much

passion and willingness the participants have to apply it. Also, it helped me to realize that the implementation would not be as fast and easy as it sounds. To my mind, the process of implementation might be more complicated than planning of it, as the teachers will have to take the challenge and the burden to create lesson study groups, lead them and to make lessons so attractive that the observers would get hooked on them and would like to learn even more. I am really interested to see how things would go for them, what problems they are about to face and how they would get them solved. I hope in our Facebook group I will have the opportunity to read the reflection reports.



11月合同カンファレンスに参加して 新しい世代を支え学び合う 長期実践研究報告・1年目のまとめの構想に向けて

すべては「分数」のために

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校 長谷川 久里子

11月の合同カンファレンスは、嶺南会場に参加した。振り返ると、11月の合同カンファレンスは、

現在授業実践中である小学校3年生算数科「分数」の授業実践を行う準備だったと感じている。

午前中は「他校の研究から学び、他校の研究を支える自身の経験と取組」という議題であったため、安居中学校の公開研究会、特別支援学校の院生の授業実践参観から学んだことをお話しした。その中で、単元の導入である第1時において、単元を見通せる学びにできる導入を行いたい。また、一人一人の子供に寄り添った授業を行いたいという思いを持っていることに気が付いた。このことより、先生方に聴いていただきながら、授業参観の価値についても見いだせていることに気が付くことができた。これまでも、院生の立場で現場の先生方の授業を見せていただいております、先生方から技を盗ませていただこうという気持ちはあった。しかし、学んだことを生かし、自分の授業ではこうしようという考えはなかなか持てていなかった。自分に置き換えて考えるということができず、その場限りの参観になっていたように思う。今回は自分の授業実践が決まっていたこともあり、授業参観での学びを自分の実践に生かすという視点を自然と持てるようになっており、自分の成長を感じることができた。

午後は、「授業実践の挑戦、探究の過程を語り合い、聴き合い、検証し合う」という議題であったため、「分数」の授業実践で考えていることをお話しした。私は、昨年も小学校3年生の学級に所属しており、「分数」の授業実践を行った。そこで、分数における1の大切さを教えることに困難を感じ

た。そのため、今年度は単元の導入で教科書には載っていない具体物操作を取り入れることで、1の大切さに気が付くことができるのではないかと考えた。ピザ1枚を3人で分けたときの一人分の言い方、ピザ1枚と半分を3人で分けたときの一人分の言い方を考える事で、分数の考え方、1が何かを考える事が大切だということに気が付けるのではないかと考えた。授業に対する思いはあっても、先生方に教科書に完全には沿わない授業構成をお話しすることにも大変勇気が必要であった。しかし、話しやすい環境を作っていただけたことで思う存分授業の相談をさせていただくことができた。

現在はまだ単元の途中であり、子供たちにとって学びの深まりはどうかはまだわからない。上手くいったところ、上手くいかなかったところ等反省点は多々あるが、院生としての自分の学びは大変大きいと感じている。「分数」の授業実践を行っていく中で、授業構想に対して自分の中で大きな変革が起きている。子供の学びの様子を、メンター教員、参観に来て下さった方々に教えていただき、支えていただきながら授業を考えられていることが大変恵まれていると感じている。11月の合同カンファレンスでは、学びの多い授業実践への後押しをしていただくことができ、同じテーブルを囲んだ先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

11 月合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年/福井大学教育学部附属中学校 大黒 康弘

澄み切った心地よい青空の下、11月の合同カンファレンスが行われた。毎月の合同カンファレンスでは、実際に自分の言葉で語ることで頭の中が整理され、同じグループの先生方と意見交換することで、新しい気付きや発見があり、それを見つけた瞬間が心地いい。今回もどんな学びが待ち受けているのか期待しながら参加した。

今月のテーマは「他校の研究から学び、他校の研究を支える」である。このテーマのもと、全体の話題提供では、嶺南東特別支援学校の河端先生のお話をお聞きした。高等部の研究活動の良さを小学部や中学部を含めた学校全体に広めるために、大切なことのヒントを教えていただいた。その中で印象に残ったのは、他学部に対して高等部の取り組みを「主張」す

るのではなく、他学部の先生方に高等部を参観していただき、「知ってもらう」という姿勢が大切で、浸透するには時間がかかるということであった。私が勤務する附属学校でも、来春から開校する予定である義務教育学校開校に向けて、今夏から小中合同の教育実践研究会が2ヶ月に1回程度のペースで行われているが、互いの校種をよく理解するために、まずは自分の校種を「知ってもらう」というスタンスが大事なのだと改めて感じた。今後は、中学校の先生が小学校の授業へ、小学校の先生が中学校の授業へ気軽に参観し知ってもらうことも手立ての1つだと感じた。時間はかかるかもしれないが、小学校と中学校それぞれが大切にしていることを尊重しながら、どの

ように 9 年間で系統的につなげていくことができるか、じっくり考えていきたいと思った。

グループに分かれてのセッションでは、県外派遣教員の先生が、今年の 4 月から福井の教育に触れて感じたことや学んだことを語られた。その中で印象的だったのは、福井の先生はまさに職人で、すべてのことに徹底してやっているという言葉であった。具体的には家庭との協力も得ながら生活習慣をしっかりさせていることが、礼儀正しさや良い授業態度につながり、それが学力向上につながっていること、また校内での定期的な公開授業や指導案検討会など、みんなで研究をしていくスタイルが教員の力量形成につながっているということであった。日頃、当たり前のように取り組んでいることが、絶大な効果を発揮していることに気づき、今一度気を引き締めて継続して取り組んでいくことの大切さを感じた。インターンの方からは、先日公開研究会があった教科センター方式を採用している安居中学校についての報告があった。話題は教科センターの話が中心になった。私も昨年度まで教科センター方式の丸岡南中学校で勤務していたが、教科センター方式は、生徒が学びに行くという姿勢ができることから、生徒の自主性を育てることができる。またオープンスペースで、各教科のメディアセンターに教員がいつもいて、いつでも生徒と話をしたり、質問したり、教科面談をする空間があるので、生徒一人一人を理解するには適した方法であり、改めてその魅力を再確認することができた。

私の方は、10 月に参加させていただいた県外の埼玉県久喜市立久喜小学校と、つくば市立春日学園義務教育学校の報告をさせていただいた。久喜小学校は、科学技術を創出する力の育成を目指して、小学校 1 年生から、算数や理科、生活科や図工・家庭・総合

の時間を減じて、素材活用やメカニズム活用、生物活用に関して学び、高学年では計測・制御のプログラミングにも取り組んでいる。私が担当している「技術」は中学校にしかない教科であるので、小学校とどのように関わることができるか、小学校でどんなことができるのか、そのヒントを得ることができた。また春日学園は全国ではまだ数少ない義務教育学校ということで、自分自身の中でもあまりイメージが沸かない部分があったが、小中の教員がどのような研究体制で、どのような教育活動を行っているのかが少しずつ見えてきた。両校に共通していたのは、義務教育 9 年間を見通してカリキュラムが考えられ、校内研究を進めていることである。小中の教員が互いの異校種の現状をよく知ることが大切だと感じた。

午後は授業を中心に、これまで取り組んできたことやこれからやろうと考えている実践をグループで語り合った。それぞれの先生方の実践を聞いて共通していたのは、1 つの学習内容を様々な視点から考えさせる過程を大切にしていること、そして学習内容が実生活に結びつくことを生徒に実感させることを大切にしているという点である。改めて授業の最初のつかみをどう切り出すか、どんな題材を使うと生徒の心をつかめるかを考える有意義な時間となった。

今回の合同カンファレンスも実り多いものとなったが、今年度の月例カンファレンスも今回が最後となる。次回は冬季集中講座として、いよいよ長期実践報告作成がヤマ場を迎える。2 年間の集大成となるよう、教職大学院 1 年目の坂井市立丸岡南中学校と 2 年目の福井大学教育学部附属中学校において、両校が大切にしている「発意」や「やりたい」を喚起させるために自分自身が取り組んできたことを柱に、じっくり書き進めていきたい。

11 月合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年/福井県立福井東特別支援学校 吉川 輝美

はじめに小杉先生よりファシリテーターについてのお話があった。私も前年度から実施してきている支援検討会でファシリテーターとして会を進める役割を担う経験を何度かしてきている。しかし、どうすると参加者の意見を引き出し、活発な会になるのかと毎回、不安をもちながら努めてきている。今回、小

杉先生のお話の中にあつた「話し合いの中で主体的な参加を促進し、参加者が協働で課題を見出し、話し合いを進めていく際の支援者であり、自分がグループを動かしてはいけない。」というポイントは大事にしなければならないと思った。他にもいろいろなポイントをお聞きし、次にファシリテーターを担う機

会があったときは、小杉先生のアドバイスを頭に置きながら挑戦したいと思った。

11月の合同カンファレンスは「他校から学ぶ」ということで、各先生方が他校へ参観に行かれた感想を報告し合った。その中で話題に挙がったのは、「アクティブ・ラーニング」、「ファシリテーター」が中心だった。例えば、グループ学習をしているときに、グループ内のリーダー的な生徒や男子生徒がまとめている様子を見て、分かっていない生徒がいるのではないかと、そういう生徒をどのように参加させてあげているのだろうかという疑問をもたれた話や、子どもにファシリテート力を身に付けさせたいと思っても自分ができていないのにできないと思うなど、いろいろな感想を出し合った。私は、福井大学教育学部附属特別支援学校の公開研究会に行き、子どもたちの主体的な学びとは何だろうと思いながら小学部の授業参観したことを話した。私は、教職大学院に入学し、学部所属のない立場となり、主となって授業を行うことがなく、自分自身、授業実践ができていないのに加え、特別支援学校における「アクティブ・ラーニング」とは何かについての理解が曖昧であることもあり、以前、知的特別支援学校に勤めていた頃の実践

との違いを見出せなかったことを話した。小杉先生から「東の子どもたちのアクティブ・ラーニングとは何だと思う？」と聞かれ、言葉に詰まった。本校の子どもたちは、重度重複障害や病気、精神疾患等を有する子どもたちであるため、どうしても個別的な関わりが中心である。小杉先生に問われるまで、本校の子どもたちの主体的な学びとは何かについてじっくり考えたことがなかったことに気づき、これから東で何をすべきかを問われたように感じた。私は、この問いを本校に持ち帰り、校内の教員と話し合ってみたと思った。

午後の語り合いの場では、以前同じグループになった先生から「その後どうなった？」と心配してくれる声掛けがあり、うれしく思った。校外に私のことを気にくださる先生がいらっしゃるということが有り難く、勇気をもらうことができた。今年度より学校マネジメントコースの先生方とセッション等をする中で、役職のある先生方から受けたアドバイスがとても参考になっている。管理職としての考えや思いを聞き、管理職と協働して学校改革をしていくことは大切だと感じている。

11月合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年/敦賀市立気比中学校 浜上 千恵

いつもと同じカンファレンスのはずなのに、なぜだか気持ちはいつもと違っていった。「これが、2年間の通常月間カンファレンスとしては最後！」そう自覚していたからかもしれない。残るは冬季集中と、これから本格的なまとめに入る長期実践報告の発表だけということも大きかった。だからこそ、この11月カンファレンスは強く心に残っているのだと思う。これまでの2年間と共に、この一日を振り返ってみた。

最初に「ファシリテーターとして」の講義を小杉先生から伺った。参加者全員が主体的に協働して課題を見つけ、話し合いをしていける援助者でなければならないと聞いた時、自分は今、学校においてその「援助者」になり得ているだろうかという疑問に思った。スクールリーダーとして全体を見つめていかなければならない立場にある中で、スタンドプレイではなく、チームワークで取組ができているかを改めて自

分に問いかける機会となった。大学院においてもこれまでに数回ファシリテーターを体験させてもらったが、すべての参加者に気持ちよく話をしてもらうためには、その引き出し方、他の参加者との共通項の見極めなどが非常に大切になってくる。今後もこれらの事を意識しながら「援助者」としての立ち位置を再確認したいと感じた。

次に久保先生からのプレゼンに感動した。数日前に本カンファレンスにおけるプレゼンを依頼されたとの事だったが、何カ月も前からその準備をされてこられたような素晴らしい話だった。特に語り口調が非常に柔らかく、何よりご自分の言葉で話しておられたことが印象的だった。さらに、4月最初のカンファレンスでご一緒させて頂いた時、目標として話して下さったことを校内で確実に実践され、ご自身も半年という短期間に多くの研修を積み重ねてい

ことを知った。「向上心」「挑戦」その事の大切さを、久保先生の笑顔のプレゼンから教えていただいた。

その後、「他校の研究から学び他校の研究を支える」をテーマにクロスセッションを行った。今年まだ他校の研究会に出かけていなかった自分であったが、附属小の研究会を知り参加させてもらうことにした。

こうして2年間、大学院で学んだいくつもの「出会い」と「気づき」が、新しい風をたくさん運んでくれた。残り4カ月、その一日一日を大切にしながら、最後は笑顔で実践報告できる自分をめざしたい。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

自 戒

教職専門性開発コース1年／福井大学教育学部附属中学校 小形 光輝

朱に彩られた季節は早くも過ぎ去り、肌寒い日々が訪れる12月。私は時の流れの速さに焦燥感を抱くばかりである。4月、生徒と初めて出会ったあの日から8ヶ月。私はこの時間の中で何を学んできたのだろうか。思い返すと私は失敗に失敗を重ね、多くの人に迷惑をかけ続けてきた。それは自分の社会人としての意識の弱さからくるものであり、自分の努力次第でどうにでもなる部分であったからこそ後悔が残るばかりである。

先日私は一つの実践を終えた、というよりも終わらざるを得なかったため、私の授業としては終わることとなった。インターン先である附属中学校は季節ごとに大きな単元構成がなされており、秋季は日本の伝統音楽についての授業を行う。私が受け持つこととなった1年生は日本の伝統音楽の中から比較聴取しやすい5ジャンル（声明、能、狂言、長唄、民謡）の声の特徴を探り、代表作を通していつ、どこで、誰が、何のためにこのジャンルを歌っているのか、どのようにして歌い継がれてきたのかをグループで探究していく。今まで自分の専門分野である西洋音楽（特に声楽）についての授業ばかりやってきた経験が、ここで私を苦しめていくこととなる。大学の集中講義でほんの少し触れるだけで終わってしまう日本の伝統音楽という分野について、私は本当に知識がなかった。だからこそ教材研究を充実させるべきであったがある程度インターネットなどで検索をして理解したつもりになっていたために、1回目の授業から生徒の言葉を拾い、つなげていくことができなかった。特に印象に残っている悔しいと感じた部分は

「柿山伏」というワードを拾うことができなかったことだ。柿山伏は狂言の演目の一つで、小学5年生の国語の時間に生徒たちは学ぶ内容であった。私はそこに教科の枠組みを超えた学びの広がりがあるように感じた。そして中学1年としての生徒を見るのではなく、13ないしは12年間生きてきた子どもたちの学びの歴史を知ることの大切さを痛感した。そんな悔しさから始まったこの授業は6時間目にしてついに座礁してしまう。声明を探究していたグループは資料のなさから発表が難しい状態になり、民謡を探究するグループでは「ソーラン節」をヨサコイの面から探ってしまい、ニシン漁の仕事唄という本来の姿からかけ離れた調査活動を行ってしまっていた。すべては私が教材研究を不十分に行い、生徒たちの姿を見ながら適切な資料を与えることができなかったため、そしてすべてを自分の力だけでなんとか解決しようとした傲慢さが起こした失敗だった。結局授業はメンターの先生がまとめていただき、話し合いの結果、この授業の続きは先生に返すこととなった。

時間を少し遡る。11月半ば、私は若狭高校で渡邊久暢先生による短歌の実践を見せていただいた。高校生による創作活動は私にとって大変新鮮なものであり、自分の作った短歌に籠めた想いを熱く語る生徒たちの姿は胸に迫るものがあった。この実践を行うにあたって授業者は相当な努力をしたと言う。授業者も短歌について知識がないところからスタートし、30冊余の文献を読み、授業づくりを行ったと語

っていた。それからひと月ほど経たず、私はその努力の凄まじさをより強く実感している。

自分の実践を最後まで走り抜けることができなかった無念さを抱く私が次に取り組むべきことは後期公開授業の準備だった。同じ単元で授業が行われるため、私の実践の間も授業の中から多くのことを学ぶことができた。授業内容は私が行った実践よりもっと深い音楽の根底を探るもので、授業実践後の分科会では授業と生徒のレベルの高さを大変評価されていた。その中で協力者の先生方などから口々に出てきた言葉は「授業者が生徒とともに学ぶ授業」だった。授業者が知らないことを生徒が探り、ともに探究していくことでお互いに授業に向かう楽しさが生

まれるという。参加者曰く「教師がすべてを知ったとき、この実践は面白さを失う」。日本の伝統音楽についての教育は西洋のものと比べると専門家が少なく、未だに十分なものが確立していない分野である。しかし、そういった状況だからこそ、教師は教材研究をしていかなければならないし、生徒とともに学んでいく余裕がなければならない。私にはその努力する意志と余裕がなかったのだ。

1年のうちの3分の2が終わり、私は己の甘さと傲慢さ故に数々の失敗を繰り返し、多くの人に迷惑をかけてしまった。12月、私は私にもう一度問い直す。「教師とはどうあるべきか」を。

スクールリーダーだより

スクールリーダー養成コース2年／奈良女子大学附属中等教育学校 佐藤 大典

奈良女子大学附属中等教育学校(以下、本校)は、「自由・自主・自立」の精神のもと、2-2-2制の教育課程によって、完全6年一貫教育を行う男女共学の中等教育学校です。1学年約120名で、入学適性検査により入学します。平成17年度から3期にわたり、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定されています。奈良女子大学の附属として、SSHのほかアカデミックガイダンス等でも大学と連携した研究・実践が進められています。

第Ⅲ期SSHの研究テーマは、「共創力を備えた科学技術イノベーターを育成するためのカリキュラム開発」です。全校生徒を対象に「共創力」を育む6年一貫カリキュラ

ムを実施することで、科学的思考力、幅広い視野と高い科学観・自然観を背景に、課題の解決や新たな価値や概念を創りだすために協働するとともに、主体的に判断し、主張・行動できる能力を育成します。さらには、サイエンス研究会に所属している生徒を中心に、海外の連携校と共同研究を行うことにより、科学技術イノベーターの育成を目指しています。来年度からは、6年(高校3年)理系生徒対象に、学校設定科目「SS課題研究」を開講し、探究活動と少人数によるゼミ形式での講座が始まります。

このように、本校のSSH研究開発は、「裾野」を広くすることと「頂上」をより高く伸ばすことの両方を目指し、日々研究と実践を行っています。来年度の2月17日・18日には、公開研究会およびSSH成果発表会が行われます。お時間がありましたら、是非ご来校いただければありがたいです。なお、2次案内が本校HPに掲載されております。

また、本校では学習指導要領の改訂に先がけて、学校改革に取り組んでいます。具体的には、来年度から45分7限授業から65分5限授業へと変わります。1コマの時間を増やすことにより、従来の知識習得型の授業から課題解決型・探究活動を重視した授業へと転換しようとしています。

さらには、学校組織についても大きな変革が行わ



れています。来年度から「学校経営委員会」が発足します。既存のさまざまな委員会を統合し、学校全体のマネジメントを行っていく組織です。マネジメント部門を一本化することにより、多忙すぎる教員の働き方の改善を図っていきます。

ここからは、今年度の私自身の実践について、簡単に報告させていただきます。

現在、私は1年生（中学1年生）の担任をしています。この学年では、班活動を中心とした協働的な学びを意識した学年経営を図ってきました。学級活動・ホームルーム活動はもちろん、教科の授業に関しても積極的に班活動を取り入れています。

次の写真は、私の数学の授業における班学習のようすです。文字式の導入の場面であり、言葉を使った式、記号を使った



式、文字を用いた式のそれぞれについて、特徴や利点について班ごとに話し合い、発表し議論を深めていきます。「なぜ数学では文字を使うのか」という根本的な問いについて班で議論することにより、文字の有用性を認識し、スムーズに文字式の学習につなげていくことができました。

1年で実施される行事についても、内容を大幅に見直しました。特に5月に実施した「一泊行事」は、今年度から場所が変更になったこともあり、プログ

ラムを一から作りました。「キャンプファイヤー」では、「学年の漢字」を決めることにより、学年全体の目標に向かって一丸となって取り組んでいこう、という団結力が生まれました。ちなみにこの学年の漢字は「最」です。「最高・最強の学年でありたい」という想いからこの漢字に決めました。

12月上旬には「音楽会」を実施しました。音楽会自体は毎年行われている行事ですが、今回はクラス合唱だけでなく、新たに学年合唱を取り入れました。そして、クラス合唱・学年合唱の練習や音楽会当日の運営は、音楽係が中心となって行いました。これは、福井大附中の教育研究集会で見た全校合唱の練習のようすに感銘を受け、本校でも学年合唱を実施したい、という想いから実現しました。当日は保護者の方にも参観していただき、121名のハーモニーを聴かせることができました。今後は、この行事を他学年にも広げていきたいと考えております。

このように、教職大学院で学んだことを活かし、新しいことに挑戦しています。この学年がこれからどのように成長していくのが楽しみです。さらには、今年度実践したことをしっかりと振り返り、これからの本校の「伝統」にしていければと考えています。



自分に出来ることを少しずつ

スクールリーダー養成コース2年／カリタス女子中学高等学校 黒瀬 卓秀

長期実践研究報告書の提出締め切りまで、残すところあと1ヶ月となりました。今から1年と11ヶ月前、校費で教職大学院に派遣されることになったとき、自分が学校改革の旗手とならざる得なくなる覚悟はしたものの（そりゃ、「スクールリーダー養成コース」に入るのですから）、具体的なその姿を想像することはできませんでした。それは今でも変わっていません。しかし、その一方で自分自身に変化があったことも事実です。一番大きな変化は、職場において「人と人をつなげること」、「既存の枠組みからはみ出すこと」を意識するようになったこ

とでしょう。

その現れの1つとしてご紹介できることがあるとすれば、「授業研ニュース」を個人で同僚向けに発行し始めたことです。他校の授業研に参加した、同僚の授業を見せてもらった、自分の授業を見てもらった、合同カンファレンスに参加した、などを通じて学んだことや感じたことを同僚と共有すべく発行しています。「授業研ニュース」と銘打っていますが、内容は授業研に限らず、校内で行われたイベントの報告の場としても使おう（ある種の内部

広報ですね)と思っています。「授業研ニュース」は、PDF に変換し教員のメーリングリストで配付していますが、今秋より立ち上げたカリタス学園福井大教職大学院生メーリングリスト(現在、カリタス小学校と幼稚園からそれぞれ 1 名ずつ福井に通っています)にも送っています。小学校の先生と会ったときに、「黒瀬先生、あれ読んだよ。」と声を掛けられることもありました。他校種の状況はよく分からない、というのがこれまででしたが、もしかすると幼稚園から高校までつながった「カリタスの一貫教育」を作り上げる一助となるかも知れません。個人として発行しているので、発行のサイクルも自由、テーマも自由。気楽にやっていけるのがいいところです。出来ることを少しずつ、息長く続けていきたいものです。

さて、もう 1 つ紹介できるとすれば、模試過去問の活用についてです。県立高校の先生方は何を今更と思われるでしょうが、校内模試が行われる一ヶ月程度前に、前年度の過去問を生徒に配り自宅でチャレンジさせるようにし始めました。これまで本校では、一部の生徒を除けば「実力」で受験し、合否判定には一喜一憂するものの復習は大してしないという状況にあったのです。2, 3 年前から、理科が教科として模試過去問を配ることを始めていたの

ですが、他教科に関しても配った方が効果的だろうと思い、学年の教科担当者と相談の上、主に私の方で印刷して配ることにしたのです。また、試験後には、業者が作成した正答率順になった問題一覧に各教科担当者が手書きでこの問題だけは解き直して欲しいというコメントを記入して、生徒に配るようにもしました。手書きのコメントがなかった以前と比べ、「生徒はよく読んでいましたよ。」と担任の先生から報告がありました。

以前の私は、模試についてのこのような取り組みは、進路指導部が音頭を取ってやるべきで、自分が動くようなことではないと考えていたように思います。福井大に通うようになったことに加えて、私が所属している学年の生徒とは 5 年目のつきあいということもあり、この子たちを何とかしてあげなければと強く思っていることが大きいです。

先日、女性レーサーとしてルマン 24 時間レースにも出場していた井原慶子氏の講演を聴く機会がありました。3 流チームと 1 流チームの違いは、機材ではなく一人一人の提案力とコミュニケーション能力にあるとのことでした。同僚・生徒のプライドを尊重しながら、1 流のチームを作っていきたいと思いを新たにしました次第です。

研究集会・公開研究会などの報告

板橋区立中台中学校 新校舎落成記念式典

板橋区立中台中学校の新校舎落成記念式典に参加して

福井大学教職大学院 客員教授 森 透

11 月 3 日(木)の文化の日に開催された拠点校である板橋区立中台中学校の教科センター方式の新校舎落成記念式典に木村優先生と参加した。私は 2 年ほど中台中学校に関わってきたが、プレハブ校舎で熱心に学んでいた生徒たちと先生方を思い浮かべ、本当に新しくきれいで、教科センター方式に没頭できる校舎がようやく完成したことを心よりお祝いしたいと思った。記念式典は 11 時から 11 時 50 分、落成記念祝賀会は 12 時 40 分から 14 時までという予定が組まれていた。記念式典は約 130 名近い来賓の方々、教職員と生徒たち、保護者の参加で、総勢 500 名近い方々が新しい体育館に集い行われた。来賓の

方々の中に、地元の町内会の方々や民生児童委員、保護司の方々が参列されていることを座席表で知ることができ、本当に地域から支えられている学校であることを改めて認識することができた。

北村康子校長をはじめ、教職員の先生方と PTA の方々がプレハブ校舎の時期をなんとか乗り越え、新たな教科センター方式の校舎として再出発できることを、一緒に学んできた一人として心より喜びたいと思った。来賓祝辞で感動したことは、3 名の方はいずれも原稿用紙を準備されたのかもしれないが、ほとんどそれを見ずに自分の言葉で正面に座っている

生徒に向かって、熱いメッセージを生徒たちと教職員の皆さんへ送り続けたことである。来賓の方々がみな、中台中の新たな出発に期待し、そして温かい気持ちをもたれていることが伝わってきた。生徒たちが歌った校歌と合唱曲も心に染み入るものであった。

式典終了後、校舎の見学を来賓の方々がいくつかのグループに分かれて先生方が案内され、各教室やコーナーでは生徒たちが一生懸命説明している姿には感銘深いものがあった。これから新校舎で生徒たちは新たな学びにチャレンジすることだろう。

祝賀会は 12 時 40 分開始の予定であったが、校舎見学が盛り上がり、各グループの方々が熱心に各教室やコーナーを見た関係で、大幅に祝賀会の開始時間が遅れたが、それもこの中台中の今後を熱く応援する姿勢だと感じた。祝賀会での私のテーブルは、初対面の方々がほとんどであったが、皆さんと楽しく笑顔で語り合うことができた。祝賀会の最後に体育館会場の最前列に教職員全員が一列に並び、一人ず

つ自己紹介をされたことはとてもよかった。この先生方が新しい中台中を担っていくという決意と抱負を感じることができた。今後、今までと同様に北村校長が全体をコーディネートしていくと思うが、ぜひとも同じ板橋区の教科センター方式の先進校である赤塚第二中学校と協働し、全国の教科センター方式の学校とも連携・協働しつつ、積極面と課題を認識しつつ、新たな構築とチャレンジに期待したいと思う。



教育実践研究フォーラム in 長崎大学 2016

葛藤×感動ー長崎ラウンドテーブル報告ー

教職専門性開発コース 2 年／福井市中藤小学校 増谷 淳

冒頭から一つ反省と謝罪をしなければならないのだが、私は毎回県内外のラウンドテーブルに参加する度に、同じような感想を書くことでレポート等をごまかしてきた。「他の分野の話であっても、どこか自分の実践につながる点がある」、「ラウンドテーブルで他の分野の方がいるからこそ、新鮮な意見をもらえる」と無難な感想をこれまで書いてきた。だが、今回の長崎ラウンドテーブルに関しては今までとは異なる感情を抱いた。だからといって、何が違ったのかを言語化するのは難しい。とにかく覚えていることとして、長崎は温かかった。気候だけでなく、同志との触れ合いの中で感じたことだ。はっきりとは伝えられないかもしれないが、長崎での 2 日間について、「違い」に焦点を当てて振り返りたい。

11 月 5 日。長崎大学の院生によるポスターセッションを見させていただいた。その中の数枚のポスター

を見て、まず面食らう。「Q-U」、「アセスメント」、「知識構成型ジグソー法」、数値による統計調査や ICT を活用した分析。私たち福井の院生には馴染みのない言葉が並んでいた。学部時代の卒業研究で統計分析を行った私にとっては、懐かしさと共に違和感を覚えた。学校拠点方式による実習を中心として、児童や私自身の成長を実感しつつある今日この頃。子どもとの関わりや日々の学校生活で細かな数値や分析を導入しようとは思ったこともなかった。彼らの研究発表を見て、文字通り「研究」が行われているように思った。そして、大学院の在り方の違いを目の当たりにして、わずかな不安も生じた。私はこれまで大学院で何を学んできたのか。

長崎大学の院生は上で述べたような教育研究を行っているが、ほとんどの院生が週に 1 日、学校現場での実習を行っている。その実習の中で研究を行った

り、研究に関連した授業実践を行ったりしているようだ。長期間にわたって学校現場での実習を行う点は同じだが、何より日数が違う。私たち福井大学の学部卒院生は基本週 3 日のインターンシップを行っている。学校現場で授業参観、個別支援、授業補助、授業実践を繰り返す中で「実践的指導力」を学び続けている点が特徴といえるだろう。

長崎大学の院生を話す機会があり、実習についての考えを話し合うことができた。すると、何人もの院生から同じ言葉を投げかけられた。「週に 3 日行くのはうらやましい」と。その言葉を聞く度に、これまでの 1 年半の実習生活が走馬灯のように思い出された。人に「うらやましい」と思われるほどの実習を、果たして行ってきたのだろうか。大学によって異なるとはいえ、私はインターンシップを通しての実践研究に自信を持っていいのか。自分の 2 年間は何だったのか。週 3 日実習を続けたことに価値はあったのか。この日の夜、院生同士で交友を深めた際も、心のどこかには不安が募った。そんなモヤモヤを焼酎で飲み込み、1 日目は床に就いた。

11 月 6 日。「教育実践と省察のコミュニティ」をテーマに長崎ラウンドテーブルが行われ、疑問と不安と旅の疲れと二日酔いとを抱えながら、1 年半の実践を語ることになった。私は公立小学校のインターンシップで昨年度は 3 年生、今年度は持ち上がりで 4 年生とかかわってきた。そのことを語ると、長崎大学の院生はやはり「週に 3 日の実習は本当にうらや

ましい」と言ってくれる。その声に応答するべく、2 年間同じ学級や児童とかかわってきたからこそ見てきた成果や、私が取り組んできた実践について語ることができた。院生生活も残り 5 か月となり、一教師としての不安や課題を抱えていることも伝えられた。どの聴き手の方も温かく聞いてくださり、気になる点はどんどん質問をくださった。ここでまたまたふと気づく。私はこれまでの自分の成果や課題がはっきりと伝えながら、この語り合いを楽しんでいた。実習学級の児童と 1 年半向き合ってきたことで、彼らについては担任の先生の次に詳しい自信がある。また、昨年度から見続けていることで、児童の成長を実感する場面も多くある。その中で私自身が一教師として成長できたという自信もある。私自身はこれまでの実践にしっかりと価値を見出すことができていた。

これまで福井と長崎との違いを振り返ってきたが、長崎の院生は私たちの取組に対して批判や否定をほとんどせず、むしろ「うらやましい」と言ってくれた。なんて温かい人たちだろう。そんな温かさに囲まれたおかげで、私自身の教育実践を省察する機会になった。取組は異なるが、教師を志す情熱に関しては共通している。ならば、私たちは彼らに負けない私たちがなりの“研究”を進めなければならない。様々なことを気付かせてくれた長崎の方々に感謝しながら、そして再会する日を心待ちにしながら今後も邁進したい。長崎は温かかった。

長崎で得た「学び」と「出会い」のかけら

教職専門性開発コース 2 年／福井市中藤小学校 山田 芳裕

11 月 6 日昼。長崎駅の改札を抜け、帰路に就く。共に過ごした院生と、思い出を語り合う車内。「本当に充実していた楽しい時間だった」の言葉に尽きる。今回縁あって、「教育実践研究フォーラム in 長崎（以下ラウンドテーブル）」に参加させて頂いた。生まれて初めての九州・長崎の地。どのような人々と出会い、学びを深めることが出来るのか、胸を高ぶらせながら福井を出発した日が、随分と前のように感じる。それほどまでに今回のラウンドテーブルは、有意義で濃密な時間であった。2 日間で得た「学び」と、長崎で出会った人との「出会い」を振り返る。

ラウンドテーブル 1 日目は、午前中に長崎大学教職大学院生による「ポスターセッション」が行われた。長崎大学ストレートマスターの院生は、普段から講義を受講し、各々が研究テーマを掲げ、学んでいる。時々生まれた問題意識をもとに研究を行い、長崎市内の公立学校に実習とした形で出向くといった実践を行っていた。我々は、週に 3 回の長期インターンシップと、院生同士で自らの実践を意味づける週間カンファレンスで学びを深めている。長崎と福井の学び方の違いを目の当たりにしていた時、ある長崎の院生から「どんな研究をしているんですか？」と質問された。「研究」と尋ねられると、戸惑ってしまう自分がいた。なぜなら、長崎のように講義を受け仮

説を立て、それを実証するために中藤小に行っている訳ではないからだ。改めて考えてみる。我々が行っているのは、「実践研究」であり、そこで出会った子ども達との関わりや、自らの思いを俯瞰的に振り返る。その時々感じた思いや子どもの様子から、深めたい(研究したい)点が出出されるのではないかと考える。2年目になり、日常が安定している今だからこそ、福井大学教職大学院の学び方が、私自身にマッチしていることに改めて気付くことが出来た。

夜に行われた懇親会では長崎院生と関わる機会が多く、お互いに「どんな感じで過ごしてるの?」といった疑問があり、大いに盛り上がった。長崎特有の「離島実習」の話や、ストレートマスターの学校現場での立ち位置に悩んでいる話題など、大学院や地域性は違う中でも、似た悩みを持った院生が多かった。普段では中々出会う機会のない県同士、方言や食文化の違いに感銘を受け、交流することが出来た。お互いに教師を目指す院生との関わりは、非常に楽しいものがあり、福井から見ると遠い長崎の地であるが、互いに刺激し合う仲間と出会うことが出来たと感じ

ている。長崎院生が福井の取り組みに驚き、「その学び方がいいなあ」と言ってくれたことは非常に嬉しかった。また、出会って数時間しか経っていない我々を、その後の院生の打ち上げ(飲み会)に誘ってくれた。その他にも多くのおもてなしをしてくれた。長崎大学教職大学院の関係者に、この場を借りて感謝したい。

長崎の地で過ごした日々は、本当に実りのあるものであった。自らの実践を語り、聞いてくれる先生方が意味付けてくれることによって自信がつくと同時に、福井教職大学院に、誇りを持つことが出来た。また、本当に短い時間ではあったが、共に楽しい時間を共有することができた、長崎院生の方々。再度会う時には互いに行ってきた実践を、杯を交えながら語り合いたいと心から思う。

思い出話に花が咲き、7時間も電車に乗っていたとは思えない程早く、福井駅に着いた。明日からも、更なる飛躍を胸に、遠い長崎にも名が轟くような教師に成るため、精進していく。

福井大学教育学部 教育実践研究公開クロスセッション

A Learning Experience from Teachers-to-be

スクールリーダー養成コース2年/福井大学教育学部附属中学校 マグラブナン・ポーリーン

Last December 18, I participated in the educational practice cross-sessions of university students from the School of Education held here at University of Fukui. It was attended by professors from DPDT and Tamagawa University, junior high school and senior high school students, and of course the teachers-to-be.

During the orientation, Endo-sensei explained the flow of events for the day. The first part was poster presentation, followed by small group discussions where the third and fourth year students reported their practice records and/or things learned while the second year students facilitated the discussion. In each group, there are first year university students, professors plus a junior or senior high school student. He also emphasized that one of the goals of inviting high school students is for these

teacher-to-be to understand further the learning situation of this generation. Hence, they were strongly encouraged to ask the presenters questions. In this way too, the university students will be able to reflect back on their own research interests, acquired knowledge and communication skills.



Although it sounded like learning is more inclined towards the university students, this was a great opportunity for the younger ones to have a glimpse of what is happening in the teacher training program in the university, to hear what the latter's impressions and reflection on their short internship, and perhaps have a picture of how teachers are being trained.

During the poster presentation, a high school student asked a group, 'At my JHS, we used to have a lot of group works and discussions to make the class 'active learning'. Now in my high school, it is different. We don't do that often. What do you mean by active learning?' The group then went back to what do they really understood about active learning and trying to explain in the language of the high school student. In another group I listened to (more of asked), they mentioned about how the prohibiting bringing of toys can lead to classroom atmosphere susceptible to bullying; so their idea is to allow students to bring toys when they create their own classrooms. But in the Philippines, one of the reasons why we do not allow toys, aside from being a distraction, is because it may be an object for comparison which may lead to bullying or other problems arising from economic inequality which was beyond the group's consciousness which was perfectly understandable because of the difference in culture.

The two presenters in my group talked about how and what have they learned so far in their stay in the university. The third year math education major shared how she had enjoyed mathematics from elementary to high school who shifted from wanting to be a high school to a junior high school and now an elementary math teacher. Her experience during their practicum early this year made her fell in love with Grade 2 elementary students and the kind of classroom atmosphere there was. Her eyes were

glistening as she talked about these students and mathematics as well. The other presenter is a graduating student who did a lot of volunteering (e.g. Big Brother and Sister Movement of Japan, at orphanages, at schools for the disabled, etc.) during his stay in the university which broadened his understanding about diversity in learning and about how social conditions can affect one's motivation to interact and to learn.

It was nostalgic for me to hear these university students talk about their perceptions about education as I reminisce my own training. At the same time, I think that this is an enriching authentic opportunity for these university students to learn by communicating their thoughts to an audience that does not necessarily speak their jargons. I then remembered how I would ask my student teachers to explain their understanding of algebraic operations (or any other topics) to 10 year-olds to have them reassess their own understanding by being able to convey the concepts in its simplest possible form. As future teachers, communicating your thoughts in the language of the audience — students — is an important skill in creating a learning environment where teachers and students understand each other.



実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2017 spring sessions

2/17(fri) 17:30-18:40

2/18(sat) 9:30-17:40

2/19(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）

総合研究棟

アカデミー・ホール

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

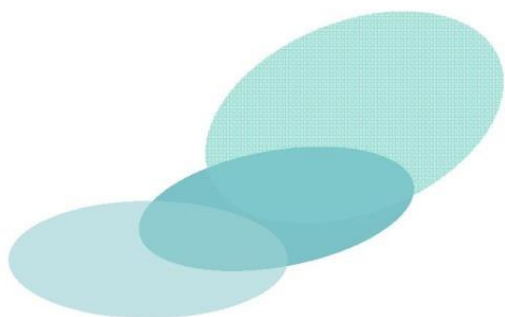
2017.2.17-19

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会



実践研究 福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions

2/17(fri)

Pre-session 17:30-18:40

教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

2/18(sat) 9:30-17:40

9:30-10:50

社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦

11:00-12:20

Students' Poster Session

保幼小教育フォーラム「子どもの世界を広げ、つなぐために」

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティー支え合うコミュニティに向けて

B 教師①21世紀の教師教育をイノベーションする

学校管理職養成の今日的課題を考える/教職大学院の可能性と課題

②これからの学部段階の教員養成を考える:実践を聴き、夢を語る a:教員 b:学部学生

C コミュニティ:学び合うコミュニティを培う 何がコミュニティの持続的発展を支えているのか

D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める forums

特別セッション B②教師(国際)

学び合う教師のコミュニティが

世界の子どもたちの21世紀の学習を支える

「日本型教育の海外展開」福井キックオフ ミーティング

13:30 開会挨拶 「日本型教育の海外展開推進事業」について

鈴木 寛 (文部科学大臣補佐官、東京大学・慶應義塾大学教授・福井大学教職大学院客員教授)

13:45 「福井型教育の日本から世界への展開」

前川 喜平 (文部科学省事務次官)

小林 栄三 (伊藤忠商事株式会社社長)

鈴木 規子 (JICA 独立行政法人国際協力機構理事)

淵本 幸嗣 (福井県教育庁企画幹)

柳沢 昌一 (福井大学教職大学院専攻長)

15:45 国際教育実践クロスセッション

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

2 / 19 (sun)
8:20-14:00

SessionIV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で出てきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は下記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は12月5日から2月10日を予定しています。
- 2/19のsessionIVの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
2/19のsessionIVの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。
- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報は福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions 平成 29 年 2 月 18 日(土)

保幼小教育フォーラム「子どもの世界を広げ、つなぐために」

幼稚園・保育所・認定こども園は、子どもが家庭から社会へと初めの一步を踏み出す場であり、さまざまな人や物に触れて、大きく成長していきます。そしてその育ちが小学校へとつながっていきます。このセッションは、幼児期から学童期の、子どもの世界が広がっていく始まりの時期に焦点を当て、園や学校でどのように子どもたちの育ちを支えられるのか、考えたいと思います。

具体的には、まず保育園・幼稚園・小学校から、それぞれの取組について 1 つずつ話題提供いただきます。若い保育者も多い幼児教育の現場で、子どもの育ちを支える力をいかにして高めたらいいのか。園内での研究保育や事例検討をどのように進めたら保育者の力量につながるのか。幼児期の子どもの育ちを小学校の授業の中で生かし、伸ばしていくにはどうしたらいいのか。3 つの報告を踏まえて、小グループでお互いの取組を交流しあい、一緒に考えていけたらと思います。幼児教育や小学校教育に関心を持つ多くの方のご参加をお待ちしております。

話題提供：福井県内保育所・滋賀県内幼稚園・福井県内小学校（予定）

コーディネーター：岸野麻衣（福井大学）

1 日時 平成 29 年 2 月 18 日（土） 11：00～12：20

2 会場 福井大学文京キャンパス 総合教育棟V（教育系 1 号館）
6 階コラボレーションホール

3 参加費 無料

※ 自家用車での入構・駐車も無料です。

18 日（土）午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。
午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。

4 申込方法 福井大学教職大学院ホームページ（ <http://www.fu-edu.net/> ）より、
申込フォームをダウンロードの上、申込方法に従って申し込みください。

5 その他 当日午後と翌日には、実践研究福井ラウンドテーブルが開催されます。
当日午後は、学校・教師教育・コミュニティ・授業研究といった様々な領域にわたるポスター・シンポジウム・フォーラムが開催され、翌日は小グループでの実践交流が行われます。これらのセッションにも是非ご参加ください。
詳細は、福井大学教職大学院ホームページ（ <http://www.fu-edu.net/> ）をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions 平成 28 年 2 月 18 日(土)

Students' Poster Session

「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来のイノベーション』」のご案内

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions、2月18日（土）Students' Poster Session 「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来のイノベーション』」のご案内です。これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

1 日時 平成 29 年 2 月 18 日（土）

10:20 - 10:50 受付・ポスター発表準備

11:00 - 12:20 **Students' Poster Session**

12:30 - 13:10 ランチ・休憩

13:10 - 14:10 **学び de 交流 タイム**

小学生「きずなをつくる」

中学生「夢 語ろう会」

高校生「イノベーション 語ろう会」

2 会場 福井大学文京キャンパス 総合教育棟 I 13 階 大会議室

3 参加費 無料

※ 自家用車での入構・駐車も無料です。

18 日（土）午前中は大学正門ゲートに係員がおりますので直接お進みください。

午後は守衛所での手続きが必要な時間帯がございます。

4 準備物 発表物、筆記用具、お弁当 ※発表用ポスターは A0 版を掲示可能です

5 発表申込方法

福井大学教職大学院准教授・木村優 E-mail: sputniksign@gmail.com 宛に、ポスター発表申込の旨を 2 月 11 日（土）までにお知らせください。申込書をメール返送いたします。

6 その他・備考

児童生徒さんの来場や送迎に関しては、学校の先生方もしくは保護者の方々に引率をお願いいたします。当日は、会場：大会議室の入口スペースを待合室として利用可能です。昼食（お弁当等）は児童生徒各自でご持参願います。

Schedule

12/26 Mon - 28 Wed 集中講座

1/4 Wed - 7 Sat 集中講座・長期実践研究報告作成

1/7 Sat 大学院説明会

1/29 Sat 長期実践研究報告締め切り

2/4 Sat 第 2 回入学試験

2/5 Sun 長期実践研究報告会

【編集後記】JICA との Knowledge Co-Creation Program がスタートしました。国際展開に伴い、今後このニュースレターは国際的なコミュニケーションの場としてますます進化していくのだらうと予感しています。思えば最近日本語以外の言語（英語）の声を編む機会が増えてきました。巻頭言を寄せてくださった JICA の又地淳さん、原稿を寄せてくださった皆様ありがとうございました。どうぞよいお年を。Happy New Year!（半原）

教職大学院 Newsletter **No.92**

2016.12.26 内報版発行

2017.1.16 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp